

2025 年度 幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく自己評価

作成日

令和8年3月10日

法人名

園 名

学校法人正和学園

幼保連携型認定こども園正和幼稚園

まとめ

全体平均

4.63

第2章第2節

乳児期の園児の保育

第2章第3節

満1歳以上満3歳未満の園児の保育

一人ひとりの生活リズムに寄り添いながら過ごしている。起伏に富んだ園庭にて、十分にからだを動かし四季折々の草花を日常的に触れ合い遊びに活用している。特に土・光に関する感覚をあげよう経験をしている。子どもが自分でやりたい気持ちを尊重している。食材に触れる機会も多く取り入れ、食材そのままの味や形にも興味を持っていた。ギターやジャンベ、電子ピアノを使用して、音楽に合わせて体を動かしたり、歌を歌う活動をしすることも多かった。

第2章第4節

満3歳以上の園児の教育及び保育

自分の意見を伝えたり、相手の意見を聴き行動し、挑戦してみることもあった。子どもたちの興味に合わせて様々な活動をしている。台湾との交流をきっかけにスパイスへの興味からの活動を年間通して実施した。また田んぼ活動から生き物、光、氷など、日常の中で気づいたことが多くあった。その気づいたことを調べたり、意見交換をしたりした。コントラバスやオルガンの解体、ジャンベの皮の張り替えを子どもたちと共に行い、仕組みに興味を湧かせていた。

第2章第5節

教育及び保育の実践に関わる配慮事項

園庭遊びなど、満3歳児未満児と幼児は時間をずらして活動したため重大な事故にはつながらなかった。同じ年齢で区切って育ちをとらえた一斉に行う保育・教育ではなく、保育者は、園児一人ひとりの姿に目を向けている。先にやり方を伝えるのではなく、園児自身が自ら試したり挑戦したりする過程を大切にしている。園児一人ひとりのペースに合わせて対応している。

第3章

健康及び安全

園内や近隣の畑や田んぼでの収穫体験を通して、食の循環や環境への意識を高めた。収穫したお米を使用したもちつきをした。管理栄養士が食事の様子を見て回り、アレルギーやハラル食に対応している。毎月、時間帯や想定をかえて避難訓練を実施している。日常の安全点検はしているが環境により怪我につながらないようにする。地震や台風など災害時を意識した地域イベント等も参画しているが合同で防災訓練を自治会との実施を計画していく。

第4章

子育ての支援

「ゆったりラウンジ（駅前）」や「ころころひろば（親子遊びの会）」など、様々な時間帯に保護者が立ち寄れる空間や場所をつくっている。山崎団地との連携により、月に一度「町田山崎団地冒険遊び場」を実施しており浸透してきた。関連園や近隣の児童発達支援事業所との連携を図り、対象児の困り感に対し個別支援がより丁寧に行えるようになってきた。海外出身者が多く在籍しており、様々なご家庭に合わせた対応や配慮を行うことができた。

第5章

職員の資質向上

全国規模の対外的な発表を複数回行い、園のことを知っていただいた。現場職員が話せる機会を作り出した。養成校との連携も図り、台湾やカナダなどの海外との交流の機会を継続的に作った。園外研修を受けた職員が、研修担当講師となり園内研修を行った。アトリエ環境を見学に行き、共有を図った。見学に行った職員が、職員会議で写真と共にアイデア等を共有し、質向上に努めた。環境の再構成について、職員意識を高めるのが次への課題である。

総合

一人ひとりの生活リズムや気づきを尊重した日々の暮らしを大切にしていた。園児は自然の多い環境の中、多様な文化や地域社会への関心をひろげた。自分の意見を伝え相手の意見を聴き行動し挑戦する様子が活動内容にもあらわれていた。年間を通して循環を意識した田んぼ活動やカイク等をはじめとする生き物などの活動をした。ユネスコスクールに正式登録された。保護者支援では園庭開放、駅前ラウンジ、未就園児親子遊び会、山崎団地冒険遊び場等の場などでご家庭が頼りにできる居場所となるよう実施した。ドキュメンテーション等をご家庭に配信し成長のプロセスをご家庭と共有している。子どもも大人も安全面への意識をもち園内環境や活動の充実をより一層すすめていく。職員は、研修に参加する機会が多くあり保育の質向上を図った。

データ表

内容	項目数	平均
「乳児保育」	0	#DIV/0!
「3歳未満児保育」	32	4.47
「3歳以上児保育」	53	4.60
「教育保育の配慮事項」	10	4.70
「健康・安全」	29	4.59
「子育ての支援」	18	4.94
「職員の資質向上」	9	4.78
計	151	4.63

データグラフ

